



やま だ みのる
山田 實さん

(特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構理事長)



釜ヶ崎から社会の矛盾と 差別の構造を追及する

22歳で釜ヶ崎へ

山田實さんは、釜ヶ崎で日雇い労働や野宿生活をする人たちの生活・労働環境の改善に取り組んできた。現在はNPO法人釜ヶ崎支援機構の理事長という肩書きをもち、取材や講演の依頼を受けることも多い。釜ヶ崎の労働者・野宿者支援の「顔」とも言うべき存在だが、初めて釜ヶ崎へ足を踏み入れた時は22歳の若さだった。「学生運動をやったから公安に睨まれてね。アウトローの世界で生きるしかないと思ってたところに、釜ヶ崎で活動している友人から応援を頼まれたのがきっかけです」。

排除された人が差別しあう「構造」

ほんの手伝いのつもりで釜ヶ崎に入って驚いた。「当時の釜ヶ崎は、暴力的な手配師と労働者とのぶつかり合いが日常茶飯事でした。仕事をさせても給料を払わない、契約の満期前になると嫌がらせをして追い払うといったことがまかり通ってたんです」。「日雇い労働者は法律の枠外におかれ、市民的権利など認められていなかった。野宿生活者ともなれば、1980年代までマスコミでも公然と“浮浪者”といわれていました」。どこも当てにならないと感じた山田さんは、自ら山奥の飯場を1週間かけて探し出して未払いの給料を払わせるなど、労働者からの相談に1件1件対応していった。そのなかで、日雇い労働を取り巻く「差別の構造」が見えてきた。

日々雇われ、日々解雇される労働者たち。けがや病気と隣り合わせでありながら何の保障もなく、体を

壊せばたちまち路頭に迷うことになる。また、暴力的な親方や手配師もまたさまざまに暴力や差別を受けてきた存在だった。「弱い立場にいた彼ら自身も、暴力で人を思い通りにすることを教えられたんですよ」。狭い釜ヶ崎で、社会から排除された人たちが生き延びるために、互いを差別しあい、暴力で支配関係を築いていた。

「野宿者を生み出さない」という視点の施策を

「日雇い労働をめぐる構造を変えなければ何も解決しない」と、1980年、釜ヶ崎日雇労働組合委員長に就任。1993年から「釜ヶ崎就労・生活保障制度の実現を目指す連絡会」（釜ヶ崎反失業連絡会）共同代表を務め、1999年に前述のNPOを設立した。2002年には「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が施行され、野宿者問題が社会や人権の問題であるという認識が広まった。

現在の釜ヶ崎は、暴力的な手配師は影をひそめ、高齢化が進む。以前より平穏ではあるが、課題はまだまだ残されている。「当事者にとっても、予算的な面でも、福祉や医療で野宿者を保護するというだけでなく、働ける人に仕事を保障するなど“野宿者を生み出さない”という予防的な視点の施策が必要です」。「目の前で死んでいく人を見ると、取り組まずにおれないんです。」そろそろノンビリしたいと笑う山田さんだが、当分は東奔西走の日々が続きそうだ。